令和5年度（2023年度）文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ・プログラムの開発
ー当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するためにー

2024年2月
令和5年度インクルーシブ・プログラム開発事業
相模原市・相模女子大学

令和 5 年度（2023 年度）文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ・プログラムの開発
－当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために－

目　次

ご挨拶　・・・・・・・・　1

実践報告　・・・・・・・・　2
・プログラムの概要、クローズドなゼミ活動の意義　・・・・・・・・　3
・当事者のための生涯学習の場である「セミナー」
（「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」）　・・・・・・・・　１３
・当事者による情報発信・啓発活動である「メディア活動」
（「インクルーシブメディア」）　・・・・・・・・　１９
・当事者による調査・研究活動である「リサーチ」
（「インクルーシブリサーチ」）　・・・・・・・・　２３
・学び続ける大切さを知る「啓発連続講座」　・・・・・・・・　３３
・令和 5 年度インクルーシブ・プログラム開発事業
連携協議会　・・・・・・・・　３５
・2023 年度インクルーシブ・プログラム開発事業総括　・・・・・・・・　４０
・メディア掲載（プレスリリース）　・・・・・・・・　４２
・学会・出版物への掲載（2023 年度）　・・・・・・・・　４４

おわりに　・・・・・・・・　４５

ご挨拶

日頃から、相模女子大学・相模女子大学短期大学部の教育活動に対し、ご支援を賜りましてまことにありがとうございます。

相模原市と本学は、一昨年度より文部科学省による「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」に協働で取り組んでまいりました。このたび、３年目となる令和５年度の成果を報告書の形にまとめてお目にかけることになりました。

多様性を包含した生涯教育の検討は、本学の社会貢献の一環としても大きな課題であり、その意味でも、この研究活動は本学にとっても重要な取り組みと考えております。これまでの実績にさらに積み重ねられた今年度の研究成果に基づき、持続可能な事業実施体制を構築し、さらなる生涯教育の充実をめざしてまいりますので、引き続きのご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

末筆ではございますが相模原市をはじめ、この実践研究に関わってくださったすべての方々に厚くお礼申し上げます。

令和６年２月

相　模　女　子　大　学
相模女子大学短期大学部　学長　　**田 畑　雅 英**

実践報告

プログラムの概要、クローズドなゼミ活動の意義

相模女子大学　日戸由刈

１．はじめに

わが国では、特別支援学校高等部や高等特別支援学校を卒業した知的・発達障害者の多くは卒業と同時に就職する。同世代の定型発達の若者の多くは大学や専門学校に進学し、そこで「主体的に過ごし、悩み、語り合う自由な時間」を経たのち社会人となる。この違いーいわばモラトリアムの時間を十分に経験せず、一足飛びに社会人となったことーが、知的・発達障害者のその後の人生にどのような影響を及ぼすかは、明らかではない。

相模女子大学では、特別支援学校高等部等を卒業した知的・発達障害の若者を対象に「インクルーシブ生涯学習プログラム」の開発を行っている。本稿では、プログラムの試行開始から 2023 年度までの経緯をふり返り、2023 年度のプログラムの特長、およびプログラムの基盤となるクローズドなゼミ活動の意義と成果について述べる。

２．プログラム開発の経緯

１）2019 年度

「インクルーシブな生涯学習プログラム」の開発は、文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」の委託を受けた相模原市が相模女子大学に再委託するという連携・協力体制のもと、全学的な取り組みとして行われている。このような運営体制は初めからあったわけではない。

本プログラムの試行が始まったのは 2019 年度、前々年度に横浜市立若葉台特別支援学校（横浜わかば学園）を定年退職した川口信雄氏の「卒業生の中に、本当は大学で学びたかった、という声が少なくない。本学の中に知的・発達障害の若者と学生がともに学ぶ場をつくることはできないか」という熱意に押され、一教員である筆者のゼミ活動の中に数回の交流機会を設けたことに端を発する。この年度の参加者は、川口氏が顧問をつとめる「ゆたかカレッジ横浜キャンパス」（福祉施設）に所属する知的・発達障害の若者 4 名と日戸ゼミの学生であった。

知的・発達障害の若者と学生の交流には一定の効果が認められた。知的・発達障害の若者たちは同世代の若者文化を話題とした学生との会話を毎回楽しみにしていた。また、ときには自分たちが体験した差別体験を学生に打ち明け、それを聞いた学生がわがことのように怒り、悔しさや納得いかない感情を共感しあう場面もみられた。一方、学生は交流機会を重ねるごとに、知的・発達障害についての理解を深め、「サポーティブ」な態度が身についていった。これもひとつの効果と言えるかもしれないが、「支援する・される」という一方向的な関係性は、インクルーシブな生涯学習という本事業の目的にそぐわないようにも思われた。

2019 年度はクローズドなゼミ活動のほか、文部科学省から事業委託を受けた「ゆたかカ

レッジ」の協力を得て、本学の生涯学修支援課が運営する市民講座「さがみアカデミー」にて全5回、知的・発達障害の若者が自由に参加できるオープンな生涯学習講座（セミナー）を開催した（最後の1回はコロナ禍により中止）。このセミナーは事前申込制であるが、参加要件はなく、参加費は30歳以下は無料。講師は、2回は特別支援教育の教員に依頼し、2回は本学社会マネジメント学科教授の湧口清隆氏や青山学院大学准教授（当時）の米田英嗣氏に依頼した。結果、特別支援教育の教員は「わかりやすく、ゆっくりな説明」を心がけた講義であったにも関わらず、参加した知的・発達障害の若者が強い興味関心や満足を示したのは「経済学と鉄道」や「脳と心」など大学教員による専門性の高い講義であった。

本セミナーには、クローズドなゼミの参加者のみならず、川口氏の教え子である横浜わかば学園の卒業生などが口コミで集まり、リピーター参加者となっていった。彼らのほとんどが障害者雇用による就労を安定して続けているものの、家と職場との往復だけの生活となっていた。セミナー当日は自主的に早い時間から集まって会場設営の手伝いをし、終了後も残って片付けの手伝いをしながら、参加者同士での気軽な雑談を楽しんでいた。また、就労している知的・発達障害のリピーター参加者は、学生や一般社会人よりもはるかに学習意欲が高く、講義中は積極的に質問したり、講義終了後はそれぞれが自分から感想を述べ合う姿がみられた。

２）2020年度

以上をふり返り、筆者は川口氏とともに次の仮説を考えた。すなわち、知的・発達障害の若者が大学で学びを楽しみ、かつ学生とフラットな関係性を築くためには、対象を、学校を卒業し就労している知的・発達障害の若者（勤労青年）に絞った方がより効果的ではないか。そこで、仮説の検証と新たなモデルの開発を目的に、前年度のセミナーのリピーター参加者である勤労青年にクローズドなゼミ活動の参加を呼びかけ、4名が参加を希望した。

クローズドなゼミ活動では、筆者らが予想した通り、知的・発達障害の勤労青年と学生の交流において、前年度以上の効果を認めることができた。学生にとって勤労青年は「すでに就職した社会人」であり、学生にとって未知の世界を知り学生の日常的な不安に応えることができる頼もしい存在であったようだ。たとえば、学生の「就職したら、飲み会には必ず参加しなければならないのか」という不安に、勤労青年は「1回くらいは参加した方がいいかもね。でも、毎回参加する必要はないよ」と気軽に応答する。こうした勤労青年の持つアドバンテージゆえ、学生と勤労青年は「支援する・される」という関係性が形成されることなく、フラットな関係性で活発にやりとりをし、こうした関係性自体を心底楽しんでいるように見えた。余談であるが、この年度に参加した勤労青年全員が、次年度以降も活動への参加継続を希望し、後述する「インクルーシブ・リサーチ」やメディアなどの役割を担うようになり、現在は本プログラム開発の積極的な協力者になっている。

一方、オープンなセミナーについては、相模原市発達障害支援センターに働きかけ、相模原市が主管するピアサポート事業などと関連づけ、発達障害支援センターの職員と筆者ら

の協力体制で運営を行うことになった。残念なことに、2020 年度はコロナ禍のため企画したセミナーすべてが中止となったが、この年度の話し合いが基盤となり、その後の相模原市との連携体制に発展した。

３）2021 年度から 2022 年度まで

2020 年度後半、文部科学省障害者学習支援推進室の後押しにより大学執行部、相模原市それぞれが本プログラムの意義を認め、2021 年度から相模原市が文部科学省の委託を受け本学に再委託するという形で、大学と行政の連携・協働による本格的なプログラム開発が始まった。大学では全学的な取り組みとして展開していく方針が決まり、学長直属のサブワーキンググループと位置付けて副学長が代表を務め、生涯学修支援課が事務局を務めることとなった。この運営体制は 2023 年度も持続している。

サブワーキンググループには本学人間心理学科の狩野晴子准教授など新しいメンバーも参加した。社会福祉の専門家である狩野氏は「プログラム開発では障害者権利条約の理念を重視し、当事者主体で進めていくべきである」と提案し、この新しい方針に沿って「インクルーシブ・リサーチ」が開始した。さらに翌年、当事者が活動の様子を取材し、その魅力を You tube で発信する「インクルーシブ・メディア」をメディアの専門家の支援を受けて立ち上げることになり、加えて相模原市が開催する連携協議会において市内の関係機関の代表者や学識経験者と並んで勤労青年や学生が委員に就任するなど、当事者が参画したプログラム開発の体制づくりが着々と進められた。以上の経緯を図 1 に示す。

2021 年度から 2022 年度までの活動は、報告書（「行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ生涯学習プログラムの開発」）にまとめられ、本学のホームページに掲載されている（https://www.sagami-wu.ac.jp/longlife/inclusive/）。

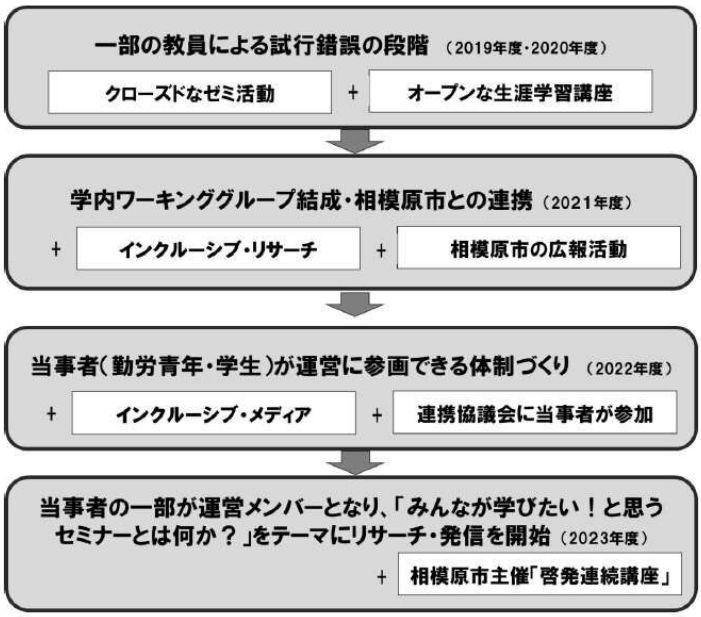


図1 開発の経緯

３．インクルーシブ生涯学習プログラムの概要

2022 年度より本プログラムの開発と実践は大学教員のほか学外のコーディネーター1 名が責任を担うこととなった。2021 年度に視察した神戸大学の「学ぶ楽しみ発見プログラム（KUPI)」（神戸大学大学院人間発達環境学研究科，2021）を参考に、より多くの知的・発達障害の若者と学生がフラットな関係性を築き、同世代でともに学ぶ楽しさ、交流する楽しさを経験し、「第三の居場所」となる場づくりを目指している。

これまでに構築されたインクルーシブ生涯学習プログラムの概要を、日戸（2022）を引用して紹介する。プログラムは図 2 に示す通り、段階的に 3 つの活動で構成される。それぞれのねらいは，以下の通りである。

第 1 段階であるインクルーシブ・セミナーは，中学生以上であれば誰でも参加可能な市民向けのオープンなセミナーである。興味関心に合う講義や、講義後小グループにわかれた「趣味自慢タイム」（小集団活動）を通して，知的・発達障害の若者が大学のキャンパスで学ぶ楽しさ，学生や市民との交流の楽しさを体験する。

第 2 段階であるエンパワメント・グループは，さらに 2 つのステップ（活動）にわかれる。第 1 ステップであるクローズドなゼミ活動は，上記のインクルーシブ・セミナーの参加者の中から大学でのクローズドな活動に関心ある若者を対象に開催している。知的・発達障害の若者にとっては同世代の若者とのコミュニケーション力を身につけること，学生にとっては知的・発達障害について理解し“一方向的ではない”ナチュラルサポートの力を身につけること，そして双方にとって「パーソナル・ポートフォリオ」を介した自己開示を通じて自己理解の深化および相談力の促進をねらいとする。

第 2 ステップであるインクルーシブ・リサーチやメディア活動は，クローズドなゼミ活動に参加した若者の中から，大学でのより主体的かつ継続的な活動への参加を強く希望する者を対象とする。知的・発達障害の若者と学生がチームとなって，自身の関心を探求するための調査方法や社会への発信の方法を学ぶことにより，長期的にセルフ・アドボカシーが可能になることをねらいとしている。双方が共通して自らの生活を豊かにするための課題と感じている事柄を毎年ひとつテーマとして取り上げ，障害当事者・学生・大学教員等が協働して調査研究を行い，その結果をインクルーシブ・プログラム全体にフィードバックするとともに，社会に向けて発信する。

これら 3 つの活動は段階的であると同時に相互的な関係にもある。インクルーシブ・ゼミおよびインクルーシブ・リサーチのメンバーはインクルーシブ・セミナーにてメンター役を担い，チームでまとめた意見をセミナーの参加者や地域の教育関係者，福祉関係者，市民に向けて発信していく。そして，これらの活動や内容に興味関心を持った若者の中から，次年度のインクルーシブ・ゼミやリサーチに参加し，ニーズ調査や社会に向けた発信者の育成という，エンパワメントの精神に基づく「当事者による後進育成と啓発」の循環モデルを想定している（図 2)。

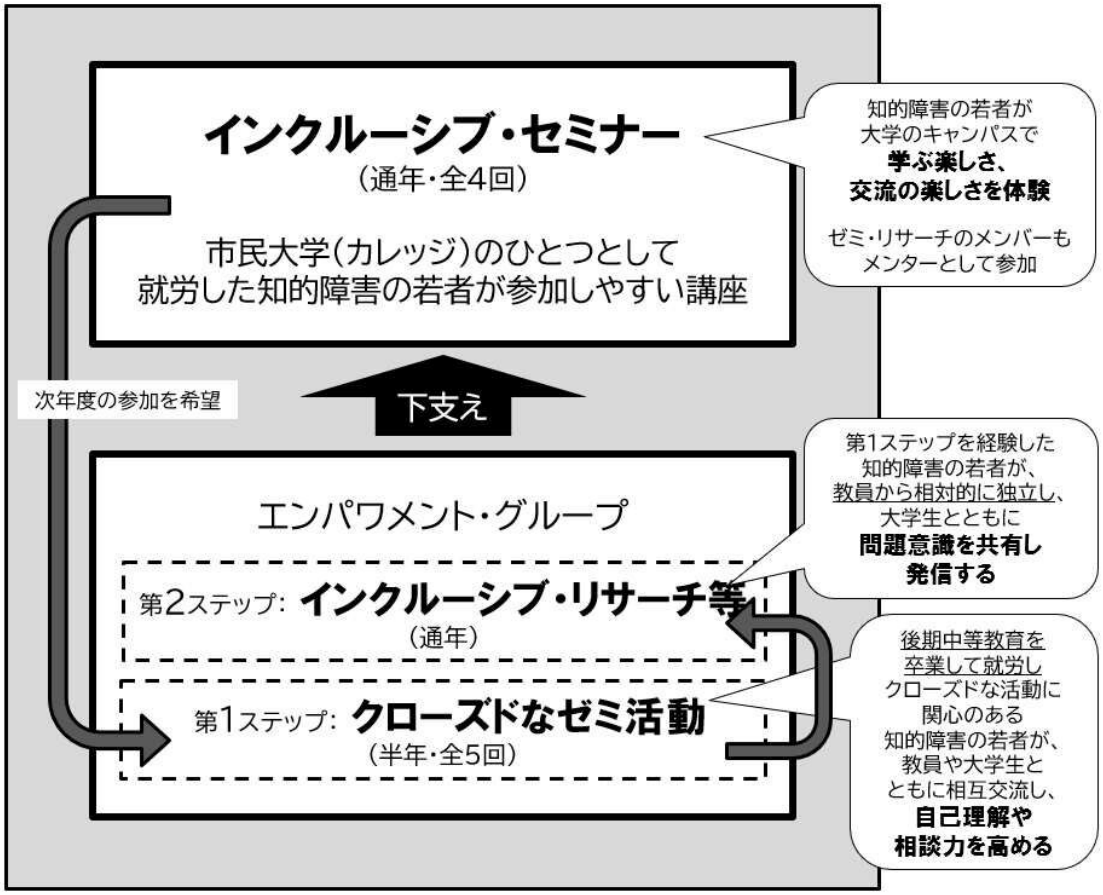


図2 インクルーシブ生涯学習プログラムの概要（日戸, 2022 を一部改）

４．2023 年度のプログラム開発の特長と効果

2023 年度のプログラムは、これまでの実践を基盤としながら、勤労青年および学生が開発や運営により積極的に携わっている点が特長と言える。前年度までにクローズドなゼミ活動を経験した勤労青年・学生の中から、より主体的にプログラムに関わりたいと希望する者が複数現れた。そこで、2023 年度は彼らを中心にチームを結成し、セミナー運営のうち小集団活動の司会進行を担ってもらうことにした。そして、実践とふり返りを通して「みんなが学びたいと思えるセミナーとは」というテーマで討論を重ね、次回の活動に反映させる仕組みをつくった。また、「本プログラムをより多くの人に理解してほしい」という当事者の願いから、セミナー場面を自分たちで取材・発信する活動を継続した。活動の詳細は、次項にてコーディネーターの武部正明氏が詳しく述べる。

一連の活動を通じた勤労青年・学生双方の精神的成長には、目を見張るものがあった。勤労青年の側は、自分たち知的・発達障害者と定型発達者とをフラットな関係に位置付けた所属集団の一員として「自分たちの強みを活かして、自分たちだからこそ、できること」を発見し、自信と誇りを持って実践しているように見える。そして、「自分たちの活動を、多く

の人たちに知ってほしい」という強い内発的動機を持ち、「学校卒業後も学び続けることは、誰にとっても必要」、「障害の有無に関係なく、ともに学べる場が必要」などのメッセージを、連携協議会のみならず、日本自閉症スペクトラム学会（2023 年 8 月）、日本発達障害学会（11 月）のシンポジウムに話題提供者として登壇し、広く聴衆に訴えている。

一方、学生の側も、日戸ゼミ 4 年生 1 名が文部科学省からの依頼を受けて、「超福祉の学校@SHIBUYA」（NPO ピープルデザイン研究所主催；2023 年 10 月）において開催された文部科学省主催のシンポジウム「大学生発！みんなのマナビ、わたしのマナビ」に話題提供者として登壇し、本プログラムの活動概要を自身の言葉でまとめ報告した（図 3）。他の 4 年生 2 名も、勤労青年とともに日本発達障害学会シンポジウムに話題提供者として登壇し、活動概要を自身の言葉でまとめ報告していている。

図3 学生による発信（文部科学省主催のシンポジウム;2023 年 10 月）

※出典 https://peopledesign.or.jp/school/symposium/1755/（2024 年 1 月時点）

５．おわりに　ー構造化されたプログラムから自主サークル結成へー

2023 年度秋、上記の日戸ゼミ 4 年生の 3 名は、本プログラムと並行して「さがっぱ当事者研究会」と称する自主サークルを立ち上げた。そして、インクルーシブ・リサーチに参加する勤労青年 5 名とともに、教員やコーディネーターなどの関与を一切必要とせず、自分たちだけで集まる機会をもつようになった。

そもそもこの自主サークル結成は、この 3 名が前年度クローズドなゼミ活動に参加した際、当時の教員主導のゼミ活動に対して「構造化されすぎており、自由に雑談できる時間が少ないのではないか」と疑問を感じたことに端を発する。3 名は教員に「勤労青年たちがどう思っているのか知りたいので、自分たちだけでのインタビューの時間がほしい」と訴え、学生と勤労青年のみでのミーティングが実現した。この経験を通じて、学生の中に翌年の自主サークル結成の動機が生まれたのではないかと思われる。

2023 年度、自主サークルのメンバーたちは、本学で学ぶ「これから教師や支援者を目指

す学生」に向けて、「これらの学生が、知的・発達障害の人たちが置かれた現状や思いを理解し、歩み寄りの気持ちを持ってもらうために、自分たちが伝えたいこと」というテーマで話し合いを重ねた。そして、筆者が担当する子ども教育学科の特別支援教育課程の 1 年生を対象とした科目「知的障害児の心理」の特別授業にゲストとして登壇し、話し合った内容を発表した。さらに、聴講した学生たちの感想を盛り込んだ一連の成果報告を、神奈川県主催「共生社会実践セミナー」(2023 年 12 月；図 4・スライド資料）のシンポジウムにて報告した。シンポジウムの登壇者は勤労青年 2 名、学生 2 名であり、まさにフラットな関係性のもと「子どもファースト。障害の有無に関係なく、ひとりひとりの個性を尊重してほしい」というメッセージを聴衆に訴える姿は、会場の参加者から大きな関心を持たれ、賞賛や感嘆の声が数多く寄せられた。

以上のように、クローズドなゼミ活動から始まった関係性の深化を通じて、主体性と社会的役割を意識し、ともに協力して発信する勤労青年・学生の姿は、まさにインクルーシブな生涯学習の成果と言えよう。彼らの今後の成長と活躍を注視していきたい。

図4　勤労青年・学生の自主サークルからの発信（神奈川県主催のシンポジウム;2023 年 12 月）

※出典　https://www.pref.kanagawa.jp/docs/m8u/kyousei-forum.html（2024 年 1 月時点）

引用文献

日戸由刈（2022）：知的障害の若者と大学生がともに学ぶインクルーシブ生涯学習プログラムの試みーコロナ禍における関係性支援の可能性と課題. 臨床発達心理実践研究 17:28-35.

1

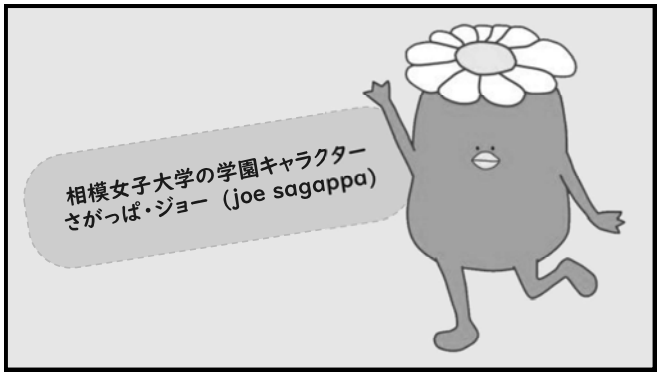
さがっぱ当事者研究会

当事者研究とは

困りごとを抱える当事者が、専門家や支援者に解決を
任せっきりにするのではなく、自分たちで困りごとについて
話し合い、解決策を考えたり、周囲に伝えたいこと、
知ってほしいことを発信したりしていく活動

❄さがっぱ当事者研究会❄
勤労青年5名（知的障がいや発達障がいをもつ、就労している青年）
さがじょ生3名による当事者研究の会

2



3

活動を始めたきっかけ

障がい者の方と支援する側される側ではなく、
お互い対等な関係で話をしてみたい！

フラットに同世代の仲間たちと
思いの丈を自由に語りませんか？
［さがっぱ当事者研究会設立］

注）本研究会の活動は、インクルーシブ生涯学習プログラムおよび文部科学省からの委託事業とは無関係です

4

活動内容

相模女子大学の教室にて実施

	日時（1回90分程度）	内容
第1回	10月14日㈯	「みんなが生きやすい社会とは？」 「日常での嬉しかったこと、嫌だったこと」
第2回	10月28日㈯	「学生生活で嬉しかったこと、困ったこと」
第3回	11月11日㈯	「発表のテーマ決め」
第4回	11月18日㈯	発表の構成を考える
第5回	11月25日㈯	本番①のリハーサル

本番① 12月2日㈯　相模女子大学 特別授業『知的障害児の心理』
本番② 12月17日㈰　神奈川県庁『共生社会実践セミナー』

5

活動内容

① 輪になって話し合う

② 話し合っているテーマをスクリーンに表示
出た意見を板書し、会話の見える化

③ 司会や板書と役割を設けた

6

テーマ

子どもファースト
～障がい関係なく、一人一人の個性を尊重してほしい～

7

「知的障害児の心理」発表の様子

聴講生（約30人）
・子ども教育学科 学生
・人間心理学科 学生
・社会人
（勤労青年、相模女子大学卒業生）
・幼稚園の先生
・元特別支援学校の先生　など

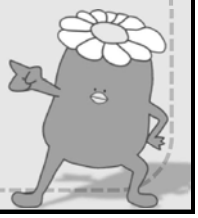
8

聴講生の感想

貴重な経験になった
それぞれの特性に合わせた
支援をすることの大切さ
保護者との連携の必要性
その人自身を見つめることの
大切さ
それぞれ理解しやすい
行動がある
答えは一つではなく、
十人十色
将来、子ども一人一人の個性が
尊重できる環境づくりができる
先生になりたい
障がいを持っている人はもちろん、もってない人にも
一人一人目を配って気持ちを
理解してあげられる教師になりたい
障がいのある人ない人を差別するのではなく、
平等に接し、それぞれの支援ニーズに対して
向き合えるようになりたい

9

クイズ



10

問題

発達障がいの特性を考慮し、
家族がやってくれた支援はどれ？

①次やる行動ノート　②交換日記　③時間管理

11

正解

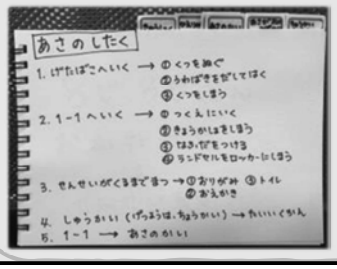
① 次やる行動ノート

12

解説

① 次やる行動ノート

他にもこんなアイテムを使ってました！



次やる行動カード

電車カード

13

「知的障害児の心理」発表で伝えたこと

「障がい者だから差別をするのは良くない、差別をしないようにしよう」と意識
➜どの様に接したらいいのか、わからなくなってしまう

一部分だけをみた考え方が、一種の偏見や差別に繋がるのでは？

一部分のみを見るのではなく、その人自身を見るために
貴方の考え方を改めて問い直すことが大切

14

「知的障害児の心理」発表で伝えたこと

「障がいの有無に関係なく」

障がいのある人だけでなく、「障がいのない人」も含まれている

どちらにも平等に接する

それぞれの支援ニーズに対して真摯に向き合ってほしい
障がいがないからといって後回しにしないでほしい

障害を持っている人にはもちろん
障害を持っていない人にも一人一人目を配ってほしい

15

活動を通して気付いたこと

・大人の介入なし，自分たちのみで企画・運営
➡平等な関係の重要性・必要性

・皆が意見を積極的に言ってくれたからこそ成り立った＋参加人数の工夫
➡信頼関係を築くことが意見の出しやすさに繋がる

・自分たちの意見を発信すること、周知してもらうことの重要性
➡現状を知ってもらえる、問題提起に繋がる

16

まとめ

今後の活動は未定

さがっぱ当事者研究会

障がい者自身が主体となって自らの意見を発信していく活動
社会的に大きな意味

休日に年齢の近い仲間たちと集まる
会社や学校以外の居場所、「サードプレイス」
心の拠り所

障がいの有無に限らず、対等な関係で活動することは
「ともに生きる社会」に繋がっていく

17

18

当事者のための生涯学習の場である「セミナー」（「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」）

武部正明（インクルーシブ生涯学習プログラム　コーディネーター）

【概要】

インクルーシブセミナー（以下、セミナー）は、2022 年度までの趣旨を継続した上で、いくつか変更の上で企画・実施した。

まずセミナー名については、これまで「インクルーシブセミナー」と称していたが、インクルーシブとは何かを学ぶセミナーと解釈してしまう」との指摘を受けた。本セミナーの目的は、あくまで障害の有無を問わず広く地域の若者が大学に集い、学び、楽しむことであることから、「文部科学省　障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」事業で先行する「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム～知的障害青年のための大学教育の創造～」（e.g. 津田，2023）を参照して、本セミナーでは「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」と命名した（図 1）。

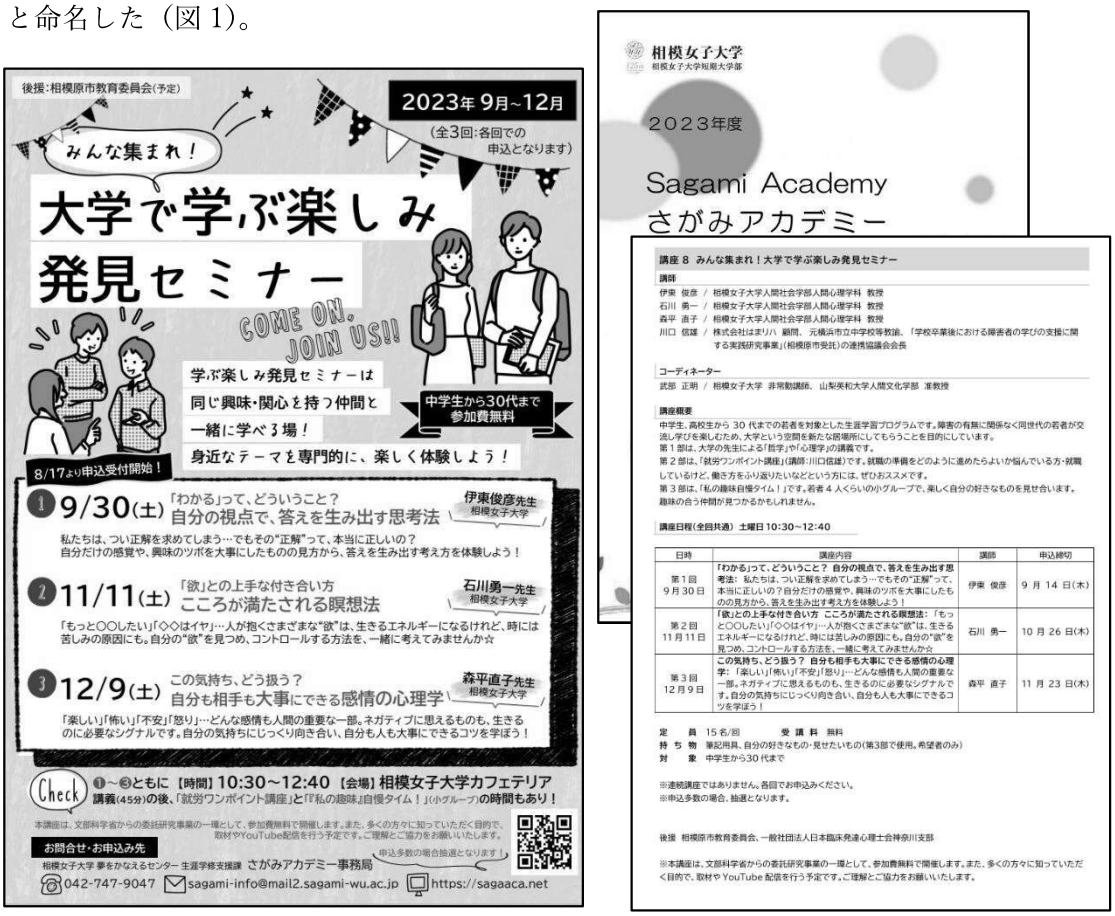


図 1　「大学で学び楽しみ発見セミナー」チラシ及び「さがみアカデミー」パンフレット

次に、参加対象を中学生から30台までの若者とすることで、若者が集う場であることを明確した。また、相模女子大学と相模原市の協働事業であることの強みを生かすため、相模原市発達障害支援センターがセミナー集客を目的とした「啓発連続講座」(「人生ってなに？」「働くってなに？」「ずっと学ぶってなに？」，全2回開催）を開催し、若者年代の保護者、中学校や高等学校の教員等を対象にセミナー周知を図り、若者の集客アップを狙うこととした（「相模原市啓発連続講座」を参照)。さらに、これまで数年間はセミナーの事務局（参加申込の受付事務、参加者への連絡等）には「さがまちコンソーシアム」（神奈川相模原市と東京都町田市の大学・ＮＰＯ・企業による地域社会づくり活動）にご協力いただいていたが、相模女子大学夢をかなえるセンター生涯学修支援課主催の「さがみアカデミー」に移し、開催時間・会場・広報の自由度等を確保する工夫を行った。

最後に、セミナーの枠内で参加者が自身の趣味を発表し合う「私の趣味自慢タイム」の実施方法を見直すこととした。これまでは、参加者全員の前でステージ上に立ち発表する形式であったが、2023年度は参加者が少人数によるグループに分かれ、各グループで発表し合う形とした。この形式にすることで発表しやすいこと、発表者が増えること、発表者同士の交流が促進されることが期待されると考えた。

さて、今年度のセミナーの運営体制は、以下の通りである。

表１　セミナーの企画・運営体制

役割	担当
企画・運営	コーディネーター（武部正明）
事務局	相模女子大学夢をかなえるセンター生涯学習支援課 （さがみアカデミー）
当日運営	山根美月氏（相模女子大学卒業生）
運営協力	インクルーシブリサーチ・メンバー（後述） 下村爽香氏（相模女子大学卒業生）

また、各セミナーの日時と第1部のテーマ及び講師は以下の通りである（表2)。

表２　2023年度のセミナーの日時と第１部のテーマ及び講師

開催日時	第１部のテーマ及び講師
第１回 （2023年9月30日）	「わかる」って、どういうこと？ 自分の視点で、答えを生み出す思考法 （相模女子大学人間社会学部　教授　伊東俊彦氏）
第２回 （2023年11月11日）	「欲」との上手な付き合い方 こころが満たされる瞑想法 （相模女子大学人間社会学部　教授　石川勇一氏）
第３回 （2023年12月9日）	この気持ち、どう扱う？ 自分も相手も大事にできる感情の心理学 （相模女子大学人間社会学部　教授　森平直子氏）

※各回とも開催時間は10時30分～12時40分

セミナー各回のスケジュールは以下の通りである（表 3）。

表 3　セミナー各回のスケジュール

各回の構成	内容
オリエンテーション	事前説明
第 1 部（50 分間）	講義（表 1 を参照）
第 2 部（15 分間）	「就労ワンポイント講座」（講師　川口信雄氏）
休　憩（10 分間）	
第 3 部（50 分間）	「私の趣味自慢タイム」※小グループに分かれて実施
次回セミナーの案内及びアンケート記載（5 分間）	

第 1 部「講義」の様子

第 2 部「就労ワンポイント講座」の様子
講師（右）が、勤労青年（左）に、「働き続けるためには何が必要と思うか？」をインタビュー

第 3 部「私の趣味自慢タイム」の様子

【実施結果】

３回のセミナーにおいて、参加者が回答したアンケートを集計した結果を、表４の通り報告する。

１．参加者について

表４　全３回のセミナー参加者の内訳

	参加者数 （申込者数）	性別 （アンケート回答者数）	所属	本セミナーの参加歴	主な参加理由 ※複数回答可 ※上位の項目を記載
第１回	26 名 （29 名）	28 名 （男 6：女 22）	会社員：12 パート・アルバイト:3 大学生：12 高校生：1	ある：14 ない：14	「仕事や就職に役立てるため」:16 「専門の講座を受けられるため」:13 「教養を高めるため」:10 「生活を充実させるため」:9
第２回	24 名 （30 名）	22 名 （男 8：女 14）	会社員：8 パート・アルバイト:2 大学生：9 高校生：2 その他：1	ある：20 ない：2	「仕事や就職に役立てるため」:11 「生活を充実させるため」:11 「専門の講座を受けられるため」:9 「仲間や友人を得るため」:8
第３回	24 名 （32 名）	20 名 （男 9：女 11）	会社員：9 パート・アルバイト:1 大学生：7 高校生：2 中学生：1	ある：17 ない：3	「生活を充実させるため」:10 「専門の講座を受けられるため」:10 「日常的な課題を解決するため」:9 「仕事や就職に役立てるため」:9

２．「第１部　講義」

（１）満足度について

いずれの回も約 90%以上の参加者が「満足」と「やや満足」と回答し、同様に理解度についてはいずれの回も約 90%以上の参加者が「よく理解できた」と「理解できた」に回答した。

（２）「良いと思った点」について

回答者の記述は以下の通りである。

第１回：「実際に哲学対話を行う時間が取れていた点。」、「グループワークで、皆で話す時間があったのはよかった」、「皆さんと輪になって意見交換ができたことが良かった。」、「誰でも楽しく参加出来るため、すぐに慣れることが出来るところ。」、「意見を聞くこと、否定しないこと、考えることと、生きていく上で大切なことを身につけながら話し合いができるうえに、会話がどんどん発展していくことがとても面白く感じた。」、「教授のお話を聞くだけではなく、参加者が主体となる時間・活動があった点が良いと感じた。」など。

第２回：「瞑想でスッキリできたこと。」、「日常的に使える瞑想があったので、自分の頭の中を整理したい時に使いたいなと思った。」、「瞑想など自分の知らないことを知れた。ためになった。」、「欲との付き合い方を学ぶことができた。人間は欲まみれだなと思った反面、欲まみれだからこそ人間味があるのかなとも感じました。」、「久しぶりに瞑想をしてみて頭を空っぽにして無になれたこと。リフレッシュできたこと。」、「講義を聞くだけではなく瞑想を通して体験できたこと。」、「この大学のゼミ（※講義のことを指すと考えられる）はとても自分でも勉強になると思いました。」、「瞑想の体験があり、参加者のその感想を聞けたこと。」など。

第３回：「内容が分かりやすくて良かった。」、「周りの皆さんの意見や考えをたくさん知る機会があったこと。」、「様々な人に発言の機会があった点。」、「感情は我慢せず他の人にも分かるように表情や言葉で表すと良いことが分かった。」、「たくさんの人の意見が聞けてよかったです。」、「スライドにふりがなが降ってあってどんな人でも読みやすかった点。」、「感情はちゃんと人に伝えないと上手く関係が作れないんだという事がわかり、勉強になりました。」など。

３．「第２部　就労ワンポイント講座」

満足度とその理由について

いずれの回も約 90%以上の参加者が「満足」と「やや満足」と回答した。その理由は、「人生の中で活かせると思った。」、「就職と聞くと怯んでしまいますが、余暇が大切だと知り安心する方、勇気づけられる方が多いかと思います。」、「これから就活をはじめるうえで自分がこれからどうしたいか考えるときに役立つお話でした。」、「自己理解をしていく中で好きな物できることを大切にした方が上手くいくという考え方。」（以上、第 1 回アンケートより）、「自分の知らないことを知れたので就職に生かせると思った。」、「実際に卒業した社会人の話を聞けて説得力があった。」（以上、第２回アンケートより）、「働き続けるためには早めに相談をする力が大切だということがあらためて分かった。」、「就職のポイントなどを知ることが出来ました。」、「働き続けるためには早めに相談をする力が大切だということがあらためて分かった。」、「実際の当事者の方のお話が聞けて良かった。」（以上、第３回アンケートより）など。

４．「第３部　私の趣味自慢タイム」

（１）満足度とその理由について

いずれの回も約 90%以上の参加者が「満足」と「やや満足」と回答した。その理由は、3 回を通じて「他のメンバーと楽しく話をすること・話を聞いてもらうことができたから」、「他のメンバーの趣味の物を見ることができたから」の２項目に 70%以上の参加者が該当すると回答した。同様に、「自分の趣味のものを見せることができたから」に約 50～70%弱の参加者が該当すると回答した。また、自由記述の回答では「以前の大勢の前で発表する形も楽しかったけど、少人数だと気軽に意見交換ができて楽しかった。」、「趣味を聞くことはあっても、実物を見れることは少ないので楽しかった。」などが回答された。

（２）「私の趣味自慢タイム」のグループの位置づけ

アンケートにて、「『私の趣味自慢タイム』のグループは、あなたにとってどのような場でしたか？」という質問（回答は自由記述）を設けた。その結果、「自分のことを話せる場」、「落ち着く場所でした。」、「自分の好きなことを話せて嬉しかったですし、他の方の趣味を聞くことができて興味を持った」、「凄く仲良く出来る事になるんだなって思いました。」、「とても楽しく出来てみんなとコミュニケーションを取れる場を作ってくれた。」、「自分を伝える場であり、みなさんと仲良くなれる場でもありました。」、「傾聴しあうことができて居心地が良い場所でした。」、「とても穏やかな時間でした」、「自分の趣味を知らない人でも興味をもって聞いてもらえる場。自分もいろいろな知らない分野について知ることが出来る場所」、「自分の知らなかったことを知れる場」、「初めて会う人と趣味を共有して分かち合う機会だったのでとても嬉しかった。」、「皆のプラスな感情が集まる場」、「自分を安心して見せられる場所」、「人によって興味や得意なことが違うことを知れた場所」、「自分のことを知ってもらえる」、「自分の世界を広げる場」などが回答された。

５．セミナーのまとめ

参加者の参加動機と第 1 部と第 2 部の満足度との間には関連性がみられる一方、第 3 部については事前の参加動機には含まれていないが、同世代との趣味を介したコミュニケーション活動に対する満足度がみとめられる。しかし、参加者層は各回で中学生と高校生が参加するようにはなったが、概ね 2022 年度までと同様に社会人及び大学生が主であった。学齢期や青年期から生涯学習及び余暇活動に参加することの意義は、成人期に就労後も継続して仲間づきあいや余暇活動の場を継続することができ、それが就労を継続させる一因になる可能性が示唆されている（e.g. Iwasa et al., 2022）。特に、今年度実施方法を小グループ別とした「第３部　私の趣味自慢タイム」に対して参加者が、仲間づきあいや居心地の良い場所であったとする感想は、本セミナーが成人期における「サードプレイス」（Oldenburg, 1989）として機能する可能性を示唆しているともいえる。なお、今年度から相模原市発達障害支援センターが主催した「啓発連続講座」との連携がより機能することで中学生・高校生年代の参加者が今後増加していくと考える。